2008/10/20

G-COE プログラム
「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」
ワークショップ報告書

題目

”Sulawesi Area Studies in 50 Years: In Search of Its Identity and Local Systems”

開催時期：2008 年 10 月 11 日（土）　　（ASAFAS 院生四名がフィールド調査中）
場所：ハサヌディン大学総合研究棟 3 階（Gedung PKP, Universitas Hasanuddin, Jl. Perintis Kemerdekaan Km.10, Tamalanrea, Makassar 90245）

本ワークショップは、これまでスラウェシ地域研究に長く携わってきた田中耕司やダダンなどが同地域研究の歩みを振り返る場にすると同時に、スラウェシ地域研究の諸プロジェクトに携わってきた若手研究者が研究報告を行う場であった。若手としては、G-COE プログラムや本ワークショップを共催した ITP 事業などでスラウェシにおいてフィールド調査や現地語習得を行ってきた ASAFAS の大学院、岩田、竹安、西嶋、古川がそれぞれの研究成果や計画について発表を行った。

報告者のテーマは多様性に富んでおり、地域住民による自然資源管理、沿岸海域における環境変動にともなう人間活動の動態、経済変容にともなう地域住民の生存基盤確保の動態、カカオ産業と地域社会、スラウェシ地域における政治動態、地方自治体の分離分立運動、分権化の時代における地域アイデンティティの変容など、現在のインドネシア、とりわけスラウェシにおいて重要かつ生存基盤を考える上で不可欠なものばかりであった。

本ワークショップでは 4 つのセッションにおいて、CSEAS、CIAS の教官 2 名と ASAFAS 院生 4 人を含む、19 名が研究成果を発表した。ワークショップの会場は、大学内で最新鋭の設備を誇る研究共同棟の遠隔会議対応ホールが使われた。ワークショップに先立ち、ハサヌディン大学長が開会挨拶を行った。つづく田中耕司（CIAS 教員）による基調報告は、京都大学とハサヌディン大学の間の共同研究の 50 年におよぶ歴史をたどりながら、スラウェシ地域研究の過去と現在について論じ、今後の両大学間の学術連携の方向も示された。

第 1 セッション “Sulawesi and Japan：The Golden Age of Friendship Relations”では、日本とスラウェシ間の関係について、長年スラウェシに関わってきた日本人の方からそれぞれの取り組みについて報告を行った。本セッションのうち、松田勲氏（元在マカッサル日本国総領事）と脇田清之氏（郷土史研究家）による共同報告はスラウェシ、とりわけマカッサルにおける日本人の足跡を歴史的にたどるもので、京都大学東南アジア研究所から遠隔会議システムによってハサヌディン大学側に中継された。Dadang S.Suriamihardja 氏

（ハサヌディン大学副学長）は日本とスラウェシ各地に見られる生存基盤の持続的発展の必要性を示唆する哲学をとりあげる発表であった。森口育子氏（兵庫県立大学）の報告は自らが 20 年以上にわたって取り組んできた JICA スキームによる看護師育成プロジェクトについて説明を行った。この二つの発表は京都側に発信され、セッション後の議論では両大学側からとも活発な質疑応答がなされた。

昼食休憩をはさみ、午後からの第 2 セッションでは“History, Society And Culture”と題し、南スラウェシを代表する歴史学者、人類学者、文献学者が、スラウェシを対象として歴史研究を行う際の課題や、スラウェシからの出稼ぎ労働者について、それぞれの最新の研究成果に基づいて報告を行った。また、ASAFAS 院生の岩田剛は博士予備論文の内容に基づいて報告を行った。

第 3 セッション“Agrobased Management & Community Development”では、スラウェシ地域の環境変化にともなう人間活動の動態や、地域住民による自然資源管理と商品作物栽培について、報告が行われた。元 ASAFAS 院生で現在はハサヌディン大学教官である Andi Amri 氏はマングローブ保全事業について、ASAFAS 院生の古川文子と西嶋謙治は、これまでのフィールドワークに基づく発表を行った。西嶋はインドネシア語で発表を行った。参加者からは今後の調査研究に関する有益なコメントがあった。

第 4 セッション“Decentralization & Local Politics”は、スハルト政権崩壊後すすめられている地方分権化によって生じる政治経済的な動態に関して、スラウェシ地域に焦点をあてた報告が行われた。CSEAS 所員の岡本正明は、分権化の時代におけるポピュリズムについてゴロンタロ州を事例として考察した。また、ASAFAS 院生の竹安裕美は、マカッサル人が多数を占める農村地帯での農民の生存戦略を歴史的に振り返りながら、現在の生存戦略への新たな視点を模索する発表をインドネシア語で行った。

今回のワークショップは、東南アジア研究所へ客員研究員として招聘されたことのある研究者や京都大学 OB・OG による周到な事前準備のもと、ハサヌディン大学側の全面的な支援を得て実施された。当日は、京都大学関係者のみならず、文化学部日本語学科の学生や一般の聴衆なども来場し、参加者は 70 名ほどを数えた。これらの聴衆から積極的なコメントや質問を受けたことは意義深いことであった。

報告者
岡本正明（京都大学東南アジア研究所　准教授）＝共同企画責任者
田中耕司（京都大学地域研究統合情報センター　教授）
森口育子（兵庫県立大学地域ケア開発研究所　教授）
松田勲（元在マカッサル日本国総領事）
脇田清之（日本－スラウェシ関係史研究家）

（※インドネシア国内からの報告者）
松井和久（国際協力機構（JICA）長期派遣専門家）
Idrus A.Paturusi（インドネシア国立ハサヌディン大学長）
Dadang A.Suriamihardja(インドネシア国立ハサヌディン大学　副学長)
Agnes Rampisela(インドネシア国立ハサヌディン大学農学部　講師)
Andi Amri（インドネシア国立ハサヌディン大学海洋科学部　講師）
Edward Poelinggomang（インドネシア国立ハサヌディン大学文学部　講師）
Nurul Ilmi Idrus（インドネシア国立ハサヌディン大学社会政治学部　教授）
Nurhayati Rahman（インドネシア国立ハサヌディン大学文学部　講師）
Baharuddin Nurkin（インドネシア国立ハサヌディン大学農学部　教授）
Kausar Bailusy（インドネシア国立ハサヌディン大学社会政治学部　講師）
竹安裕美（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）
西嶋謙治（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）
古川文美子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）
岩田　剛（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）＝共同企画責任者

ワークショップ当日のプログラムは別添。

写真１　会場となったハサヌディン大学総合研究棟

写真 2　田中耕司氏（CIAS 教員）による基調報告

写真 3　遠隔会議の模様（脇田清之・松田勲氏の報告）

写真 4　Andi Amri 氏（ハサヌディン大学水産学部教員、ASAFAS 卒業生）の報告

写真 5　西嶋謙治氏（ASAFAS 院生）の報告

写真 6　古川文美子氏（ASAFAS 院生）の報告

写真 5　岡本正明氏（CSEAS 教員）の報告

写真 6　竹安裕美氏（ASAFAS 院生）の報告

写真 5　ワークショップ終了後の記念撮影